

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 看護マネジメント学分野	修了年度	平成 28 年度
氏名	後藤 由子	指導教員 (主査)	小林 紀明 (河津 芳子)

論文題目	看護職と介護職における褥瘡ケアの協働 —参加観察による褥瘡ケア実際の分析—
------	--

本文概要	
<p>目的：介護老人保健施設において看護職と介護職が実践している褥瘡ケアの協働の現状と要素を明らかにする。</p> <p>方法：関東エリアの介護老人保健施設 3 施設に勤務する、看護職員と介護職員各 1 名ずつ計 6 名を対象に双方が一緒に行う褥瘡ケア場面の参加観察とインタビュー調査を実施した。そのデータを Quick Reference (QR) の推奨事項に準じ、看護職、介護職別に実施の有無について整理した。褥瘡ケアの協働に関する項目を質的分析によってカテゴリー化した。</p> <p>結果：QR 推奨事項中、全症例に該当したのは看護職が 16 事項、介護職は 13 事項であった。参加観察とインタビューから抽出された、褥瘡ケアの協働の要素として、看護職は、【褥瘡ケアを継続するための情報共有】、【介護職の褥瘡ケアに対する評価】、【介護職に対する褥瘡ケア改善への働きかけ】、【看護職の褥瘡ケアの役割の認識】、【介護職との信頼関係に裏付けられた言動】、【介護職との褥瘡ケア継続の困難さ】、介護職は、【実施されている褥瘡ケア方法の理解】、【看護職との信頼関係に裏付けされた行動】、【介護職間で決められた役割】、【負担軽減のための対策】、【褥瘡ケアの妥当性の評価】、【介護職が主体的に褥瘡ケアを継続する困難さ】の共に 6 カテゴリーが抽出された。</p> <p>考察：看護職と介護職の褥瘡ケアの現状は、介護職は日常生活の支援にリンクする褥瘡予防方法のケアの実施が多く、看護職は専門知識をもとに判断が必要な褥瘡予防、発生後のケアの実施が多くみられた。褥瘡ケア協働の要素は、肯定的な側面と否定的な側面が混在していた。看護職は健康支援、介護職は入居者の生活を支援する、という役割の視点の違いはあるものの、その構造は酷似していた。看護職も介護職も、相互的に信頼し、サポートしようとする行動や言動が「協働の要素」として見られた。その反面、実際の協働の場面では、褥瘡ケアを継続して実践することに困難感を抱いている、という「葛藤の構造」が協働の要素のベースとして存在していた。その葛藤の中で発生した、効果的な褥瘡ケアに必要な行動が熟慮され、発展的に取り組もうとする 4 つ協働の要素が、それぞれに影響し合いながら褥瘡ケアの実践となっていた。そして、看護職と介護職それぞれの 6 つの要素の関係性が、更に双方向に影響し合うことで、効果的な褥瘡ケアを目指した実践という共通の目標へとつながっていた。</p> <p>結論</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護職、介護職全症例に共通した QR 推奨事項は褥瘡予防方法の「皮膚の観察」「除圧・ずれ力の排除」、発生後のケアの「褥瘡の洗浄」「リハビリテーション」の中の 12 推奨事項であり、生活の支援にリンクしていた。 2. 介護老人保健施設における看護職と介護職の褥瘡ケア協働の要素は、「信頼関係」と「困難感」の 2 つの協働の要素間で揺れ動く“葛藤”の構造が『協働の要素』のベースとして存在し、そこから“効果的な褥瘡ケアに必要な行動”が熟慮され、残り 4 つの協働の要素の関係性を高め影響し合いながら褥瘡ケアの実践、更には両職種が“双方向に影響し合う”ことで、効果的な褥瘡ケアを目指した実践という共通の目標へとつながっているという構造が確認された。 <p>キーワード：協働、褥瘡ケア</p>	